

ラハ恥ヲ一洗スルダケノ事ハナサントノ心得ナルベシ本
藩ノ士鄰人ト談話セシニソレハウソナラント云ハレシヲ士ノ
話シヲウソト云フヤアルトテ斬リシトイヘリ今ノ世ヨリミ
レバ何レモ愚人ノヤウナレド武勇ヲミガク一實ニ想ヒ
見ルベキナリ内匠頭ハ名将ノ子孫衆人ノ中ニテ辱メ
ラレ即時ニキリタルハコレ世風ナリ四十七士ノソノ志ヲ
繼キタル一武士ノ道ニカナヘリ佐藤直方ノ論ニ赤穂
侯ハ毒ヲクラヒテ死セルモ同シ一ニテ誰ヲ仇トセンヤト
云シ一常山隨筆ニミユ事實ヲモ究メズシテ妄ニ論シ
タルモノナラン此論ノゴトクナラバ大野九郎兵衛等ヲ大

石ニ勝レリト云ベキカ

杉田玄伯ノ義人遺事輯録ハ卷數多カラザレド堀
部武庸筆記ハ此書ニヨツテ傳ハレリ其内ノ寺坂信
行筆記ハ残缺本ナリ深祕筐底録ニ載セタルヲ全
本トス神田勝久ノ精義録ハ義人録ヨリ先ニ出来タ
ル物トミエ義人録ノ注ニ辨ジタル説ハ多ク精義録ニ
アリシカシ此書ハ後人ノ潤飾アリテ原本ニハ非ガルカト
思ハルナリ勝久ガ雜話筆記ニ享保二十年大石等
四十七人ノ三十三回忌ニ當レリ予モ其當日南條
氏ト共ニ泉岳寺ニ至リ四十六人ノ墳墓ニ參詣シ

テ予カ從弟木村岡右衛門貞行カ墓ヲ拜ス參詣
ノ僧俗男女市ノ如シトアリ勝久カ精義錄ヲ著セ
ルモイハレアリ勝久ハ刀劍ヲ好ミ新
刀銘盡ヲ著ハセリ

漢土ニ卧龍トイフ山アレバ後人其地ニ孔明ヲ祀リ
シ一明人ノ文ニミユ甲斐ニ大石村アレバ土人大石氏
ノ郷里ナリト云ヒ常陸ニ神崎ノ地名アレバ土人與
五郎ノ郷里ナリト云フイツレモ傳會ナレ其人ヲ慕
フヨリ出ル一ナリ

薩摩人甚義士ヲ慕ヒ年々十二月十四日ノ夜少
年ノ士集リテ終夜義人錄ナドノ書ヲ讀ム一アリト

西國人語レリ

四十七士ノ事ヲ詩歌ニ著セシ者今日ニ至マテ夥敷
キ事ナラシ其中ニ先鞭ヲ著シハ其角カ月雪ノ中ヤ
命ノステ處ノ句ナルベシコレ義士ノ朋友ニテ眼前ニ
復讐ヲ見タル人ナレバ是ヨリ先ナルハナシ赤石梁田蛭
岩ノ行述ニ少シ與諧人其角嵐雪等交染指蕉家之
諧盖有韻國雅之工猶有不可象之景情而諧乃不
然能鑄俗於雅轉腐於新亦一種風流可謂奎璧之
餘彩哉トアリ其角カ月雪ノ句ハ此數語ニ愧チ又物
ナリ

櫻ノ海内ノ名花ナリ人ニヨリテ顯ル、モノハ常陸ニ八

幡公ノ旌櫻常陸國志伊勢ニ牛若ノ鞭櫻吾妻路記下野ニ

静櫻下野風土記美作ニ備後三郎ノ題セシ櫻太平記河内ニ

楠家ノ士隅屋ノ規櫻河内名所圖會近世ニテハ赤穂ノ大石

櫻ナリ櫻ハ垂絲ナルヨシニテ花ノ豐艷人ヲメ想像セシ

ム又自畫杯ヲ花下ニ傾ケシ一モアランカトマヌク大石

ノ風流ヲモ想ヒ見ルナリ大石節ニ死ナズンハイカテ一

花木マデカク人ニ愛惜セラルベキ死或重シ於太山ト

イヘルハカル事ナルベシ

跋

昔者司馬公序劉道原十國紀年云。道原好著

書。志欲籠絡宇宙而無所遺。延年亦竊於家君

云爾。家君平生好著述。徃徃錄前人所未錄。其

志蓋將網羅天下遺聞軼事而止。如赤穂四十

七士傳。實其少作。而如義人遺草。如斯書。亦一

時雜著耳。今茲丙寅冬。書肆某生來請梓斯書。

延年以謂家君著書既多矣。其傳後世。何用此

緒餘為。且夫劉道原不幸早沒。故其志不遂也。

今家君康健。已至可順。精力不衰。自今著書之
富。誠將不可測。然則梓此等之書。以公之世。蓋
非其意也。雖然。語不云乎。管中窺豹。時見一斑。
如斯書。則實其一斑耳。梓而行之。亦無不可。因
校以授某生。至於大著述。如紀事本末者。則期
之他日云。

慶應二年仲冬

男延年謹書



慶應二丙寅年六月

京都寺町通松原下

勝村治右衛門

大坂心齋橋北久太郎町

河内屋喜兵衛

江戸淺草第町二丁目

須原屋伊八

同日本橋通二丁目

山城屋佐兵衛

水戸本町三丁目

須原屋安次郎

書林

發行